

(2)果物市況は安いのか

日本農業新聞紙上で、夏場以来屢々論じられている話題に、果実相場の低迷があります。直近でも都中央卸売市場の9月平均単価はキロあたり¥280 - と低迷した昨年の¥279 - に並ぶ低水準であり、しかも過去10年間で最低だったと報じています。そしてその要因として天候不順による数量・品質の不安定さや、景気低迷による消費の減退などが挙げられて、川上からの情報提供の精度を高める方策や価格重視の消費者へのアピール強化など果物バナレを危惧する面が強調されています。

確かに、数量が減少すれば単価は高くなり、数量の増が価格を下押しする方程式は過去のものとして、川下のバイイングパワーに左右される価格形成が云々されて久しいのですが、果して如何なものでしょうか。短期での直近の価格低迷に関しては主要な要因として理解できますが中・長期の流れからは今ひとつ頷けないものがあるのではないのでしょうか。特に若者の果物バナレが云々されるようになってからの小売店などでの販売をみると、カット販売やバラ売り、1個売りの増は当り前で、ミックス・カット販売など消費者は正に食べる人そのものとしての位置づけであり、ジュースなど果実飲料も豊富であれば消費量は減りこそあれ、決して増大することはないと思います。

“果物は野菜と違って嗜好品である”と言われていますが、嗜好品であれば尚更その折々での衝動買いが多いはずで、偶々買った果物が美味であれば次にまた買ってみたいようかとなりますが、それが逆の結果であったならもう二度と買う気にはならないはずで、そして、一方では贈答用商材として大きさや形、色のりなどが重視されたり、走り物を求めるなど値段の高いことが当然と思いついでいる風潮に毒されてはいないでしょうか。国産果実キロ当り単価¥400 - 台割れが昨年7月以降続いていると嘆かれますが、国産品とは別物と言われる輸入果実はほぼ安定的な価格推移を示しています。売れないにはそれなりの原因があるはずで、複合的なあるいは構造的な部分もあるでしょう。嘆き節を唄うよりも何故？どうして？なのかを立場立場で考え、改善の策を求めて行かなければならないと思います。

(鈴木重雄筆)